

傷と傷跡



社会医療法人全仁会 倉敷平成病院 形成外科医長
石田 泰久

形成外科というとあまり聞き馴染みはないかも知れませんが、体表面や整容に関する問題、疾患について外科的治療を中心扱っている科です。頭からつま先まで、子供から高齢の方まで幅広い診療を行っています。具体的な疾患としては

- ・切り傷や擦り傷などの皮膚、皮下組織の損傷
 - ・顔面骨折(鼻骨、頬骨、眼窩、顎など)
 - ・皮膚・皮下腫瘍(良性、悪性とも)
 - ・難治性潰瘍、褥瘡(なかなか治らない傷、床ずれ)
 - ・熱傷
 - ・傷跡、ケロイド、肥厚性癬痕
 - ・切断指の再接着
 - ・眼瞼下垂症、眼瞼内反症(さかまっげ)
 - ・先天奇形
 - ・美容外科
- など、色々と扱っています。幅広い範囲を治療対象としている科であるため、長年の悩み・あきらめていたことが意外と形成外科受診により解決することも多くありますので、お気軽にご相談

ください。

今回はその中でも傷と傷跡についてご紹介いたします。

「傷」と言っても、転倒や事故など怪我で生じる外傷、床ずれ・褥瘡、手術によって生じる手術創、膠原病や血流障害など内因的な原因で生じる難治性皮膚潰瘍、火傷などその成因は様々なものがあります。当然それぞれ原因に応じて治療方針、方法は変わりますが、基本的には傷を乾燥させないように軟膏や被覆材を用いて治しています。かつては、「傷を濡らさないように」、「消毒して早くかさぶたができるように傷を乾かして」などと言われていましたがこれらは間違ったことであることが分かっています。このため当科に傷の治療のために来られた患者さんには、まずは傷の処置方法の指導からさせて頂いています。傷の治癒は「再生」と「修復」に分かれます。「再生」は傷が生じた部位が同じ組織で治ることを指し傷跡がほとんど分からない状態で治癒します。分かりやすい例ではトカゲの尻尾やイモリの手などですが、人間の体では皮膚の表皮(皮膚の一番

表層)と消化管の粘膜上皮のみで起こります。これに対し「修復」は傷が生じた部分の連続性が回復することをいい、傷が癒痕組織(傷跡)に置き換えられることを指します。ほとんどの傷がこの「修復」を行い治癒します。写真に示しましたのは「再生」と「修復」の典型的な例です。上肢にお湯で火傷を負った子供ですが、治癒後の写真の様に、傷が比較的浅い部位はきれいに治癒していますが、上皮を超える様な深い傷では「修復」が起こり、少し肥厚を伴うような癒痕組織として治癒しています。

当科では傷が治った後の傷跡についても治療、相談を行っています。残念ながら一度出来てしまった傷跡を完全に無くすという事は不可能です。しかし傷跡によって起こっている問題(色調、顔面などの目立つ傷跡、盛り上がり、痛み・痒みがある、引きつれなど)については様々な方法により改善させることを目指しています。ほとんどの傷において治癒した後、色素沈着が生じます。これは傷が生じた時の炎症により、傷跡・傷跡周りの皮膚の色調が赤色や茶色に変わることになります。この色素沈着については私の外来で相談されることがしばしばあります。色素沈着は大抵の場合は月日とともに薄くなり最終的には周囲の皮膚とほぼ同じような色調となります。薄くなるまでの期間、皮膚への刺激を避け、遮

光をしていただくことが重要です。この他、目立ってしまった傷跡に対する手術治療も行っています。ただ前述の様に手術跡を全く無くすということとは不可能なので、目立つ傷跡を手術により目立たない傷跡に置き換える形になります。

傷治療、傷跡治療は患者さんそれぞれの性別、年齢、既往歴、考え方や価値観で治療目標が変わってきます。患者さんそれぞれの治療目標を相談し設定していくのもわれわれの仕事です。その治療目標を達成する、あるいは目標に近づけるのがわれわれ形成外科医の遣り甲斐であり喜びでもあります。怪我をしたとき、傷ができた時はお早めに、傷跡の相談の場合は日焼け止め等で遮光をしている状態で、形成外科外来にお越しください。



治療前



6ヶ月後